研究ノート

初となる生配信による映像コンテストに関する考察
―学生主導の第10回「One Minute Videoコンテスト」（2022）本審査を終えて―

間島貞幸†

［要旨］ 今回で10回目となる「One Minute Videoコンテスト」。前回から駿河台大学の学生が中心となり学生事務局の運営を行っている。今回、本審査の模様を初となる生配信することになった。生配信はメリットも多いがリスクも伴う。今回の経験を次回以降に活かすため、活動を振り返り考察する。

［キーワード］ 大学教育、実践教育、情報発信、オンライン配信、コロナ禍、One Minute Video

1. はじめに（本論文の問題と目的）

2022年9月10日、第10回「One Minute Videoコンテスト」の本審査が、初となる生配信で開催された。実際に企画・運営に当たったのは、複数の大学の学生たちで組織される学生事務局であり、前年の第9回「One Minute Videoコンテスト」からは、それまでの東海大学から駿河台大学の学生が中心となって活動を行った。

筆者は第1回「One Minute Videoコンテスト」（2012）から、学生事務局の指導に当たってきた。学生たちは、One Minute Videoコンテスト事務局の人たちや審査員たち、そして他大学の学生らと協力してコンテストの企画・運営を行い、その過程において、送り手としての責任を経験したり、コミュニケーション力・協調性・責任感や社会性などを養ったりすることを目的として活動している。

2022年も新型コロナウイルス感染症の流行は収まる気配がなく、一時コンテストの開催も危ぶまれたが、駿河台大学メディア情報学部の1年生から3年生までの有志14人が中心となり（他にアドバイザーとして4年生2人が参加）、無事開催することができた。

前年度にトライ＆エラーを繰り返して、コンテスト開催を成功させた学生事務局が、今回、初となる生配信によるコンテストを開催した。生配信とは何か、準備段階でどの様な問題が発生したのか、そのプロセスを通じて学生たちにとって、どのような成果があったのか、さらにどのような課題が明らかになったのか、2023年度以降、より充実した活動を行うために検証する。

2. 第10回「One Minute Videoコンテスト」（2022）本審査の生配信についての概要

2.1 「One Minute Video」とは

「One Minute Video」は、1分間の映像を通して、メッセージを世界に向けて伝える活動である。自己表現力を養い、国境を越えて興味や意見、夢や希望を分かち合うことを目的として、2010年より（公財）日本ユニセフ協会で、One Minute Video事業の取り組みをスタートしている。第5回までは日本ユニセフ協会主催のもとで行ってきたが、第6回からは独立したプロジェクトとなった。

† 駿河台大学メディア情報学部

「One Minute Videoコンテスト」では毎年発表されるテーマに合わせて1分間の映像を作成・応募するものである。記念すべき第10回となった「One Minute Videoコンテスト」（2022）のテーマは『今、あなたが伝えたいこと』である。2022年9月10日（土）に初となる生配信で本審査が行われた。全国の中学・高校・大学・専門学校から集まった作品総数は、131作品。どれもオリジナリティ溢れる作品ばかりだ。一次審査で20作品が入賞し、本審査でその中から優秀賞6作品と最優秀賞1作品が選ばれた。生配信されたコンテストの模様は10月にHP上で公開された。

最優秀賞No.82「made from word」
制作代表 佐藤 春菜さん
https://youtu.be/MNaQh3dU71Q

第10回「One Minute Videoコンテスト」（2022）本審査
https://youtu.be/M287JWrJAEI

第10回「One Minute Videoコンテスト」（2022）本番メイキング映像
https://youtu.be/t-560nkR6Fc

2.2　生配信について

駿河台大学の学生が中心となって学生事務局を初めて運営した第9回「One Minute Videoコンテスト」（2021）は、初のオンライン開催となり、フルリモートで行った。そして第10回「One Minute Videoコンテスト」（2022）では、前回の経験を活かして、初となる生配信で、開催することになった。そこで生配信のメリット、デメリットについて考えてみた。

メリット

・臨場感、ライブ感が出しやすいため、参加者は画面越しの参加であっても臨場感や『参加している』感を味わいやすくなる。またMCや参加者、制作スタッフは良い意味での緊張感を持って本番に臨むことでコンテスト全体が引き締まる。
・視聴する側もライブならではの緊張感を感じながら、「次はどのような展開になるのだろう」と、期待して視聴することができる。
・生配信を収録した映像をHPにアップする際、比較的不要部分のカットは少なくて済む。

デメリット

・配信リスクが高いこと。生放送のため本番になってからカメラが映らない、マイクが入らない等のトラブルが発生した場合、仕切り直しができない。そのため生配信の場合、インターネットの回線環境等、気にすべきポイントが多いため、トラブル対応のノウハウを制作スタッフが共有し、素早く対応できるよう事前にシミュレーションを繰り返す必要がある。

2.3　方法

生配信スタッフの体制

本取り組みはゼミ生の一部が関わっているものの、ゼミ活動ではないし、また授業の一環でもないため、学生にとって単位の取得はない。それでも卒業した学生以外、前年度経験したほとんどの学生（表1太字の学生）がそのまま残り、新たに1年生、2年生が加わって14人に2人の4年生アドバイザーが加わって学生事務局を運営することになった（表1参照）。学生たちは、他の活動ではなかなかできない貴重な経験ができること、責任感を持って目標を達成することの重要性について学べること、そして何よりも活動そのものに魅力を感じていることから自ら参加を決意したという。

生配信システムについて

コンテスト本審査は、Zoomのミーティングの音声と映像をYouTube Liveに配信するものである。生配信は前回同様、埼玉にある駿河台大学のメディアセンター第2スタジオで行った。機材は、

表１　生配信スタッフ表（太字が前回経験者）

担当	名前
学生事務局代表審査員	**磯部朋花（３年）**
学生事務局副代表ディレクター	**石井香乃（３年）**
ZOOM オペレーター	**菅野明日香（３年）**
技術ディレクター	**齊藤愛実（３年）**
カメラ	**細野珠瑠（３年）**馬偶伯（1 年）
AP	江幡美希（2 年）齋藤春佳（2 年）
AD	太田恒希（2 年）小栗宏太（1 年）
オーディオ	井上結乃（1 年）
作品出し	栗山歩未（1 年）
スイッチャー	家城卓己（1 年）
MC	江幡美希（2 年）宮田佳太（1 年）
アドバイザー	**波多野怜央（４年）黒崎穂香（４年）**

カメラ3台と映像配信用PCをスイッチャー（ブラックマジックデザイン　ATEM Mini写真５）につなぎ、そこからZoom配信/収録用PC、次にYouTubeにつないだ（図1参照）。生配信スタッフ16名（学生MC2名含む）、審査員7名（6名の外部審査員と学生事務局審査員の磯部さん）、さらに入賞者およそ30名がオンライン上に参加して約2時間の生配信の本審査を行った（図2参照）。

ZoomでYouTube Live配信するメリット

ZoomでYouTube Live配信するメリットは、視聴人数は無制限であること（Zoomの場合基本的な参加者は100名）、視聴者はZoomを全く触る必要がなく、普通にYouTubeを観る感覚で視聴できること（運営の視点から見ても参加者にZoomの使い方を教える必要がなくなるため負担が少ない）、映像がカクカクしたり、音声がひどく遅延したり途切れたりするなどZoom単体より安定した配信が可能であることである。

ZoomでYouTube Live配信するデメリット

YouTube Liveで配信する場合、視聴者に事前にURLを通知しておく必要がある。そのため、事前にYouTube Live配信の予約を行い、URLを取得しておく必要がある。さらに当日、Zoom上で予約しておいた配信情報の入力などの設定も必要となる。そのため、直前になってうまく配信できない、という問題が発生しないよう直前まで配慮する必要がある。

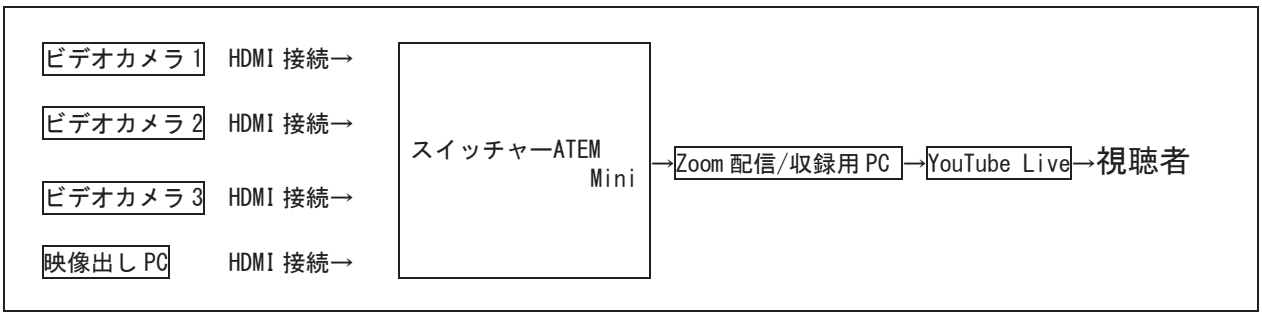

図１　機器接続図

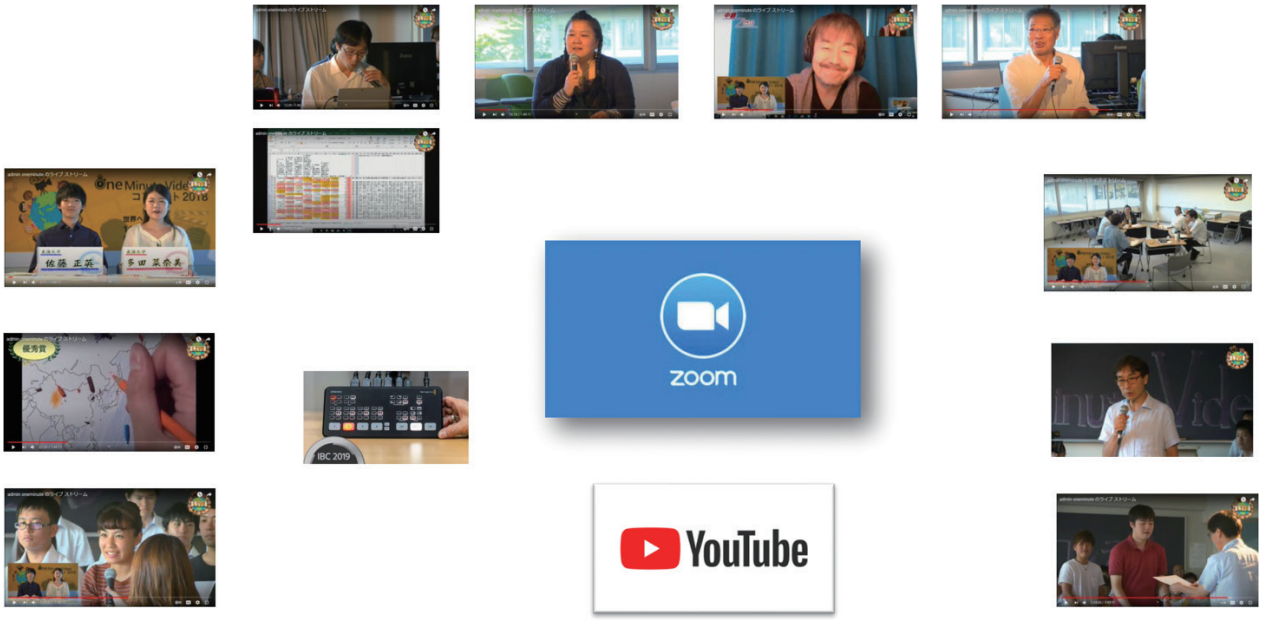

図2　「One Minute Videoコンテスト2022」生配信イメージ図

表2　学生事務局主な活動スケジュール（2022年）

3月31日	「One Minute Video コンテスト 2022」の概要発表
4月18日	学生事務局新メンバー顔合わせ、説明会
4月22日	第1回 One Minute Video コンテスト事務局 Zoom 会議〜顔合わせ
5月27日	第2回 One Minute Video コンテスト事務局 Zoom 会議
6月8日	作品応募開始告知
6月15・22日	東京・目白研心中学校 One Minute Video ワークショップ
6月27日	第3回 One Minute Video コンテスト事務局 Zoom 会議
7月9日	東京・目白研心高等学校 One Minute Video ワークショップ
7月29日	第4回 One Minute Video コンテスト事務局 Zoom 会議
夏休み期間	作品応募のための広報活動、Zoom 接続テスト、定例対面会議、リーダーと副リーダーはコンテスト事務局の Zoom 会議への参加等
8月8日	川合先生による一次審査セミナー
8月25日	一次審査で入賞20作品決定
8月29日	五嶋審査員長、斉藤さん来校、YouTube Live 配信テスト
9月5日〜8日	通しリハーサル、YouTube Live 配信テスト
9月10日	第10回「One Minute Video コンテスト」（2022）本審査の生配信
10月1日	本審査の模様を HP 上で公開

2.3　学生事務局活動スケジュール

2022年度春学期は新型コロナウイルス感染拡大が懸念されたものの、授業は対面で行われた。新体制での学生事務局の活動は、4月18日の新メンバー顔合わせから活動を開始した。コロナ禍であること、授業等で予定が合わず全員が集まることができないことから週に一度定例会議をオンラインで行った。そのほかスタジオで配信テストやリハーサル、宣伝活動、HPのブログの更新（写真1〜4）、本審査のOP、エンディングVTRや

10周年企画動画の制作、審査員や入賞者等の事前打ち合わせ、本審査の運営、そして今回新たに学生主導のワークショップを中学校と高校で行った。

2.4　リハーサルを通じて出た問題点、コンテスト本審査の生配信

本審査のおよそ2週間前の8月29日、五嶋正治審査委員長と動画配信技術アドバイザーの斉藤裕也さんが来校し、生配信のリハーサルを半日かけて行なった（写真6）。その結果以下の事前に確認すべき注意点を出し合った。

【感染防止に備えて】
・スタジオ内では、可能な限りスタッフの人数制限をし、ガラス越しで隣の部屋からのスタッフ配置を工夫する。
・編集、リハーサル、準備が長時間になる可能性があり、体調不良のスタッフの事前確認を小まめに行う。

【スタジオ配置】
・ケーブル（電源、音声）はスタッフの歩く導線に合わせ、整理する。長さが足りないケーブルは、システム情報課で借りる。

【カメラ機器】
・カメラからのケーブル（電源、HDMI）には、接触不良を避ける為にテープで固定する。
・カメラの高さは、MCの目線の高さが良い。
・本番中のカメラ操作の手間を省くため、2台から3台に増やす。

【マイク＆オーディオ】
・MCのテーブルマイクは、MC本人とオーディオ担当の学生で設置、管理する。
・拍手音でMCの声が上下しない様に、「自動」を「手動」に切り替え調整する。
・スタジオMC、映像V出し映像の音量が均一になるよう調整をする。
・配信前音量と配信後（YouTube配信）の音量チェックは必須なので気をつける。

【MC】
・エアコンノイズが大きいので、ノイズに負けないよう声の大きさを張ることを意識する。
・照明が天井だけなので、原稿を下向きで読むと照明が当たらないため顔が暗くなるので意識する。原稿を少し上位置に持ち、上向き顔を意識する。
・本番で高校生、受賞者とのクロストーク用に「想定Q&A」をメモして言葉のキャッチボール、アドリブを上手にするよう準備する。

【モニターTV】
・MC二人に観易い位置（正面、カメラ下）に配置する。

【配信の実践】
・本番直前までYouTubeからの配信実践を重ねる。
・不明な点が出たら、すぐに動画配信技術アドバイザーの斎藤さんに問い合わせする。

【スケジュール＆時間管理】
・生配信はスタート時間を遅らせる事は出来ないため、管理はディレクター、FDが行う。
・本番までの10日間のスケジュール管理が重要なのでリーダー、ディレクターで状況を見て決める。

【台本の印刷、扱い】
・本番用の「最終台本」に自分の注意事項の書き込みをする。
・本番で見にくいので両面印刷はしない。ホッチキス止めも外す。

【ZOOM不具合に対して】
・審査委員、受賞者等のZOOM不具合が発生した場合には、対応策として電話（スマホ）での声だけの中継も想定して練習しておく。

【生配信のトラブル、本番中のMCの不適切なコメントがあった場合の対応】
・訂正コメントをいくつか想定して書き出し、いつでも対応できるよう準備しておく。

本番前日までに、審査員、入賞者全員に連絡し、参加の確認、当日の予定について説明した。

表3　コンテスト本審査の当日スケジュール

第10回「One Minute Video コンテスト」(2022)　当日スケジュール　　0910版

9:00　集合～セッティング　学生事務局
9:30　ミーティング
10:00　部分リハーサル（気になるところ）
11:00　回線確認（学生事務局＋事務局＋審査員）
11:30　昼休憩～昼食
12:10　スタンバイ
12:20　受賞者集合、点呼（学生事務局＋受賞者）※11:00～と同じ zoom URL を使用
12:30　YouTube 配信スタート
12:35　審査員再集合（学生事務局＋事務局＋審査員＋受賞者）※11:00～と同じ zoom URL を使用
12:50　本番用 zoom 移動
↓↓↓↓↓↓↓↓通信障害などで zoom が落ちてしまった時の予備 URL↓↓↓↓↓↓↓
※予備 URL
13:00　本番スタート
MC 紹介、主旨説明、審査員ご紹介、開会宣言
前半入賞 10 作品紹介

参加予定	『Thank You（センキュー）』藤浪 百花（フジナミモモカ）
	『「思いやり」に「プラス」を』市橋 美空（イチハシミク）
	『言葉の後遺症』倉田 結衣（クラタユイ）
	『自分らしさを忘れちゃったボク』戸嶋 康成（トシマコウセイ）
参加予定	『そこにいて。』後藤 ひなの（ゴトウヒナノ）
	『表現の自由～校則編～』後藤 怜来（ゴトウレイラ）
参加予定	『地球の変え方』遠藤 大致（エンドウダイチ）
参加予定！	『You can be anything you like』大原 愛紀（オオハラアイキ）
	『見えない表情』池 哲郎（イケテツロウ）
渡辺先生参加予定	『Everyone Is Equal』大室 凛（オオムロリン）

後半入賞 10 作品紹介

参加予定	『性別欄』増田 瑞輝（マスダミズキ）
	『made from word』佐藤 春菜（サトウハルナ）
	『身近な罪』丸山 陽平（マルヤマヨウヘイ）
4名 13 時から参加予定	『海の叫び』鉄本 裕之（テツモトヒロユキ）
	『繋ぐ』岡本 淳雅（オカモト リョウガ）
	『Your role（ユア・ロール）』本田 幸大（ホンダユキト）
4名 13 時から参加予定	『One ピース』踞尾 泰誠（ツクオタイセイ）
	『Makeup is Free』青木 美樹（アオキミキ）
	『Our Resource Our Planet』岡田光玄（オカダミツハル）
	『「！」の魔法』古厩 阿子（フルマヤアコ）

審査中に、10 周年学生事務局企画動画流す、優秀賞 6 作品、最優秀賞 1 作品発表、五嶋審査員長のご挨拶
15:00　本番終了
17:00　完全撤収～お疲れ様でした！また来年頑張りましょう！！

本番当日、トラブル回避のために動画配信技術アドバイザーの斉藤裕也さんが立ち会い、好意でスイッチヤーの予備ほかを持参していただき、トラブルに備えた。生配信開始直後に、誤って審査員の一人の音声が進行中のMCの音声に被ってしまうアクシデントがあった以外、大きなトラブルもなく、無事に生配信を終えることができた(写真7～9)。

3. 学生の感想

活動を終えて学生事務局の学生（2年連続担当）に振りかえってもらった。

学生事務局代表　磯部朋花さん(3年)

「前年度この活動をやって忙しい反面、やって良かったと思う経験がたくさんあった。今回代表になって、後輩にも同じような経験をしてもらいたいと考え、みんなに仕事を割り振って、結果『やって良かった』と思ってもらえるよう心がけた。中学校や高校のワークショップや生配信など新たなことに挑戦でき、やり遂げられたことが良かった。」

学生事務局副代表　石井香乃さん(3年)

「本番ではディレクターとして全体のリーダー

的な役割を担当した。みんなを引っ張っていく立場なので、“この人についていくなら安心だ”と思ってもらえるよう、メンバー一人一人と積極的に話しかけ、周囲に信頼してもらえるようにコミュニケーションをとることを心掛けた。自分の経験よりもADとしてついてくれる後輩2人をフォローすることを意識して本番に臨んだ。先輩や後輩、審査員を務める他大学の先生や学生の方々と意見を交わすことができてやりがいを感じている。また目上の人とメールなどでコンタクトをとることが多く社会に出ていく上で必要なスキルが蓄積されている感覚もあり、自信がついてきた。いろんな経験が詰まっていて成長を感じる瞬間が楽しい。」

Zoomオペレーター/10周年企画動画制作　菅野明日香さん(3年)

「今回は“One Minute Videoコンテスト10年間の歴史”をテーマに過去にこのプロジェクトに関わった人たちに連絡をとり、当時の話をインタビューして10分間の動画を制作した。初対面の目上の方から話を引き出すのはすごく難しかった。夏休み中に取材し、編集を行なった。苦労して完成させた作品は『10年間を振り返ることができてあらためてこの活動の意義を感じた。感動した！』などお褒めの言葉をいただき、大変だったけど挑戦して良かったと実感した。」

カメラ　細野珠瑠さん(3年)

「高校までは自分に向いてないと決めつけて行動に移せないことが多くあったが、大学では誘われたことは断らずに挑戦しようと決めて、学生事務局に参加した。チャレンジする先々で新しい人と出会い、同じ目標に向かって取り組む中で人見知りしなくなり、今では人と話すことも好きになった。どうしたらイベントに参加してもらえるか、参加してくれた方にどうしたら喜んでもらえるかなど意見を出し合って企画立案することも楽しみながら取り組んでいる。」

3. 考察

この取り組みは、コンテストとしての充実の追求と、学生事務局に関わる若者の充実の追求である。初となる生配信は、収録と異なり、想像以上に事前準備が大変であった。たとえば機材トラブル、配信トラブル、そして本番中のMCの不適切な発言などが起こる可能性があるため、昨年度以上にトラブル対応を想定した準備の必要に迫られた。それに加えてコロナ禍による突然の出演者や運営側スタッフの欠席の可能性があったため、その対応も考えておかなければならなかった。これらの課題に対して事務局の五嶋審査員長や斉藤裕也さんに貴重なアドバイスをたくさんいただき、そして大学のシステム情報課の担当者のみなさんも細やか対応をしていただき、大変お世話になった。

学生事務局の活動に関して今回、2年連続で関わる学生が半分を占めており、コンテストの目的や意義をよく理解していたため、会議やリハーサルなどほとんど学生主導で積極的に進めることができた。先輩たちはあらゆる場面で後輩たちに対して「次年度も続けたい」と思ってもらえるよう先輩と後輩がペアを組んでコミュニケーションをとりやすくし、実際うまくとれていたと感じる場面が多かった。また関わるほとんどの学生から「チャレンジ」という言葉を聞くことができた。この活動を通じて多くの学生からコミュニケーション力など人間力の向上が見られた。今後、経験値のある学生は卒業したり、就活などでまともに参加できなくなったりするため、新たな学生の参加が必要となってくる。学内に求めることも必要だが、近隣地域や地方の大学や専門学校、高校からリモート参加での活動の可能性も模索して一人でも多くの学生が、学生事務局に参加して活動してもらうことは有意義であり、次年度以降の課題である。

コンテストは毎年継続して開催することが重要であると考えている。メインで学生事務局の運営

を任されて2年目となるが、コンテストの広報に関して、まだまだやれることが多いのではないかと考える。次年度はSNSでの広報をもっと積極的に行う、そしてこれまで一度でも応募したことのある学校などにメールでお知らせして作品応募を働きかけ、もっと広範囲なエリアから、もっと多くの作品が応募されることを期待し、次年度に備える次第である。

2022年4月29日 / 最終更新日時：2022年4月29日　いろいろ

学生事務局がスタートしました！！

こんにちは！One Minute Video コンテスト2022学生事務局です。
今年もやってきました、One Minute Video コンテスト！今年度も、駿河台大学の学生が中心となって、盛り上げていきます。
そして、昨年度に引き続き、スタッフブログの方では、準備の裏側やコンテスト情報などを発信していく予定です。更新は毎週行う予定です。閲覧してくれる皆様が、楽しめるようなコンテンツにしていきます！

先日は、メンバーが発足し、はじめての話し合いでした。走り出しは順調です！今後とも、学生事務局、全員で頑張っていきますのでよろしくお願いします。

写真１　HP スタッフブログ①

2022年6月1日 / 最終更新日時：2022年6月1日

週一でZoom会議

こんにちは！
One Minute Videoコンテスト2022学生事務局です。
対面授業が始まってみんなのスケジュールがなかなか合わないため、
学生事務局は、週に１回Zoom会議を行い、情報交換や事務局との会議のための
打ち合わせを行なっています。

写真２　HP スタッフブログ②

2022年7月20日 / 最終更新日時：2022年7月20日　いろいろ

技術の準備が始まりました！

こんにちは！One Minute Videoコンテスト2022学生事務局です。
今日から技術の準備が始まりました！去年よりもカメラの台数を1台増やしてビデオカメラからデジタル一眼に変更しました。これにより本格的な撮影ができるようになりました。

写真３　HP スタッフブログ③

2022年9月8日 / 最終更新日時：2022年9月8日

間もなく本番です！

こんにちは！

One Minute Videoコンテスト2022学生事務局です。

約半年間に及ぶ準備を経て、10日に本番を迎えようとしています。

本番と同様にリハーサルを何度も行い、改善に努めています。

声を出さずに共有するため、カンペを作成しました。

そのおかげで全体共有することが可能になりました。

五嶋審査員長から本番を前にアドバイスをいただきました。

第三者からの視点で的確なアドバイスありがとうございます。

これを参考に本番も頑張ります。

写真４　HP スタッフブログ④

写真５　スイッチャー

写真７　コンテスト生配信の画面

写真６　リハーサル風景

写真８　生配信中の指示はスマホを使用して

写真９　コンテスト生配信のエンディング風景

A consideration of the first live-streamed video contest
-After the Final Judging of the 10th Student-led One Minute Video Contest (2022)-

MAJIMA Sadayuki

[**Abstract**]
This is the 10th "One Minute Video Contest". Since the last time, the students of Surugadai University have been running the student affairs office. This time, it was decided to broadcast the pattern of the main examination live for the first time. Live streaming has many benefits, but it also comes with risks. In order to make use of this experience from the next time onwards, I will look back on the activities.

[**Key words**]
University education, practical education, information dissemination, online distribution, corona disaster, One Minute Video